様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３２９７

研究課題名（和文）日本におけるストレンジ・シチュエーション法の妥当性の検証と日本版の作成

研究課題名（英文）Examining the ecological validity of Strange Situation Procedure　in Japan

研究代表者
梅村　比丘（Tomotaka, Umemura）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：８０８０５３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,600,000円

研究成果の概要（和文）：Strange Situation Procedure（以下SSP）は，幼児が母親との関わりの中でストレスを沈静し安心して外界へ探索しているかという「アタッチメントの安定性」を，実験室で評価する方法である。SSPはアメリカで開発され，現在世界中で標準的に使用され，幼児のメンタルヘルス発達の理解に大きく貢献してきた。本研究は，日本でのSSPの妥当性を検証した。SSPで測定されたアタッチメントの安定性は，幼児のメンタルヘルスを予測することができた場合もあったが，家庭場面の行動との相関は示されなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，日本の幼児のアタッチメントの安定性を測定する最善の方法を検討するものであったため，学術的にも社会的にも意義のある研究であった。特に，アジア圏における幼児のアタッチメント研究は乏しく，学術的意義があったと言える。また，幼児のメンタルヘルスとの関連を示す結果から，社会的意義も示された。

研究成果の概要（英文）：Strange Situation Procedure (SSP) is a laboratory procedure to assess infants' attachment security with their caregivers. The SSP was developed in the U.S. and has been used in many countries as a gold-standard assessment for infant attachment security. This study examiend the validity of SSP in the context of Japan. We found that the attachment security assessed by the SSP predicted some aspects of infant mental health outcomes, whereas it was not associated with the attachment security assessed in infant's home.

研究分野：教育心理学

キーワード：アタッチメント　愛着　ストレンジシチュエーション法　アタッチメント・Qソート

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アタッチメント理論(Bowlby, 1969/1982)では，不安など幼児のストレスが高まる場面で，養育者へ近づいたり，身体的に接触したりするなどの養育者と関わるための行動は，進化の過程により，幼児の生存確率を上げるために起こったものだと考えられている。この主張をもとに，Strange Situation Procedure（以下 SSP）という，幼児が母親との関わりの中でストレスを沈静し安心して外界へ探索しているかという「アタッチメントの安定性」を評価する方法が開発された(Ainsworth, Blehar, Wall, & Waters, 1978)。SSP では，幼児のストレスを高めるために，幼児が知らない部屋で，見知らぬ女性に会い，2 回の母親との分離を経験させる。その後，再会した母親に向ける行動により，幼児のアタッチメント・パターンを以下の通りに分類する(Table1)。SSP は世界中で標準的に使用され，幼児のメンタルヘルス発達の理解に大きく貢献してきた。しかし，日本の幼児のアタッチメント安定性の分類の割合は，欧米の幼児の分類の割合とは異なる先行研究の結果が示された。

Table 1　SSP における分類

アタッチメント・パターン	幼児の重要な特徴
安定型	アタッチメント行動を示し不安感を沈静する。
不安定－回避型	無視するなど回避的行動を示し，母親と関わらない。
不安定－アンビヴァレント型	不安を鎮静化できず，母親から離れられない。
不安定－無秩序型	養育者とのかかわり方に特定の方略を組織化できていない。

これまで研究では，不安定型（回避型・アンビヴァレント型・無秩序型）と幼児のメンタルヘルスの問題（内在化問題と外在化問題）との関連が明らかになっている。しかし，現時点で日本において同様の研究は存在していない。つまり，日本において SSP で評定した幼児のアタッチメント安定性がその後のメンタルヘルス発達を理解するために有用な方法なのかということは不明なままである。

欧米では多くのSSP研究が蓄積されていて，現在少なくとも95以上の研究が行われてきた。各国の研究結果を比較すると，どの文化圏でも安定型がもっとも多い（大抵，60%以上）ことは共通していた。一方，不安定型について，欧米では回避型が多い一方，日本，韓国，インドネシアなどアジアではアンビヴァレント型が圧倒的に多いことが報告されている。

この文化差について，日本の幼児は，普段の生活において SSP 場面で起こる「見知らぬ場所」，「母親との分離」，「見知らぬ人との遭遇」が欧米の幼児と比べ少ないため，必然的に高いストレスを伴うことが多いアンビヴァレント型が多くなり，ストレスを表すことが少ない回避型が減るのではないかと指摘されてきた。この指摘のエビデンスとして，SSP 直後に唾液からのストレスホルモンを採取した研究では，アンビヴァレント型の幼児のストレスは他の分類の幼児と比べて高かったという研究結果が出ている。さらに，SSP を開発した Ainsworth et al. (1978)自身も「SSP が，欧米以外の他の社会で育てられた幼児の日常的な経験を近似していないかもしれないことを認識している(Ainsworth et al., 1978, p. xiv)。」と述べている。

しかし，Ainsworth et al.の認識は現在ほぼ全く共有されずに，SSP を様々な文化圏で用いて，幼児のアタッチメントの安定性を評定している。また，日本では大学教育や，親子支援などの実践教育でも SSP の文化差について考慮した内容を教えていない実情がある。以上より，SSP 場面がどの程度日本の幼児の日常的な経験を近似しているのか検証する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は，日本でまだ検証されていない 2 つの SSP の妥当性（『予測的妥当性』と『生態学的妥当性』）について検証することで問題点を明確にすることである。まず，日本の幼児の SSP の『予測的妥当性』の検証を行う。具体的に，SSP 場面で評定したアタッチメント安定性とその後のメンタルヘルスとの関連性を検証する。次に，日本の幼児の SSP の『生態学的妥当性』の検証を行う。具体的に，家庭場面と SSP 場面で評定したアタッチメント安定性の相関関係を検証することにより，SSP 場面と家庭場面の評定結果が近似しているか明らかにする。さらに，SSP 前後のストレスレベルを測定し，アタッチメント分類間の違いを検証する。

３．研究の方法

参加者の募集には，保育園や幼稚園の設置者を通し，幼児の保護者に依頼した。また，市の広報誌に広告を掲載した。保護者には，子どもの人権に対し十分な配慮を行っていることを伝え，同意書に署名してもらった。3 年間のデータ収集期間中，12 ヶ月から 15 ヶ月までの幼児 81 名とその母親に，SSP 場面と家庭場面の観察を行った。

SSP の実施には，広島大学にある行動観察室を使用した。信頼性のある評価のために有資格者 2 名により評価を担当した。家庭場面でのアタッチメントの安定性を評定するために，世界中で最も標準的に用いられている Attachment Q-sort (AQS; Waters, 1995)を使用した。AQS は，評定を行うための資格は必要としないが，本研究のため，事前に，評定者の大学院生と学部生は 10 時間以上の練習を行った。SSP 前後の 2 回に，ストレスレベルの生理指標であるコルチゾール値を測定した。コルチゾール値は，幼児の唾液からストレスレベルを評価できることが，先行研究より確認されている。家庭場面の調査時とそれから 6 か月後に，母親と，父親もしくは祖母の 2 者に幼児のメンタルヘルス指標についての質問紙調査を行った。複数の評価者からデータを得ることにより，質の高いデータを収集できた。最も標準的に使われている質問紙である Child Behavior Checklist (CBCL; Achenbach & Rescorla, 2000)を用いた。

４．研究成果

まず SSP 分類の割合について，81 名中，59 名（72%）の幼児が安定型に分類され，22 名（27%）の幼児が不安定型に分類された。また，不安定型に分類された幼児のうち，3 名（4%）が回避型，11 名（14%）がアンビヴァレント型，8 名（10%）が無秩序型に分類された。この値は，過去の日本のアタッチメント研究の結果と類似していて，アンビヴァレント型の幼児が，他の不安定型の幼児よりも多い結果を示した。本研究の結果は，他のアジアの国々の研究結果と同様の分類の割合を示した。つまり，日本やアジアの不安定型は，アンビヴァレント型が多いという結果が再現された。

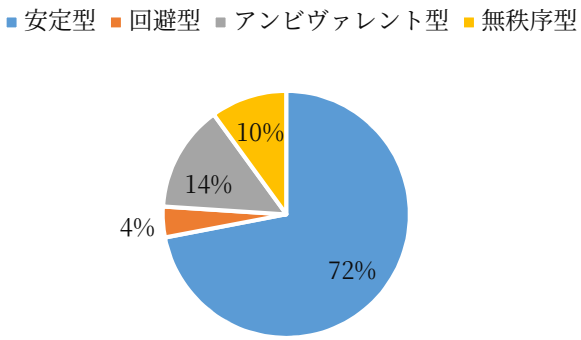

表 1 アタッチメント分類の割合

次に，SSP を用いた分類と AQS の得点の関連を調べた。SSP で分類された安定型と不安定型に AQS の得点の差が見られなかった。同様に，SSP で分類された 4 分類（安定型・回避型・アンビヴァレント型・無秩序型）の中に，AQS 得点の差も見られなかった。この結果は，実験室場面で測定されたアタッチメント行動は，家庭場面で測定されたアタッチメント行動とは異なる可能性を示唆した。

また，アタッチメントの安定性とメンタルヘルスの関連性を分析した。その結果，まず SSP 分類では，安定性と不安定型の 2 分類の差とメンタルヘルスの結果に関連は見られなかった。しかし，4 分類での結果を見た時，アンビヴァレント型に分類された幼児は，SSP と同時期に測定した外在化問題のスコアが，安定型に分類された幼児よりも高かったことが分かった。しかし，この結果は，半年後の長期的な結果との関連は見られなかった。

一方，AQS の安定性スコアは，同時期に測定した外在化問題との関連を示した。また，AQS のスコアは，母親ともう一人の評定者のスコアの平均得点と長期的にも関連を示した。この結果は，家庭場面におけるアタッチメントの安定性は，短期的にも長期的にも，メンタルヘルスの問題を予測することを示した。この結果から，日本のアタッチメントの安定性は，実験室場面よりも家庭場面で測定する方が，メンタルヘルスの状態を知るうえで有効である可能性が示唆された。

最後に，コルチゾール値の差の検討については，現在，まだ分析中である。こちらは，今後，分析を終えた後，論文として発表する予定である。

以上の研究成果は，アジア圏の文化に特化した幼児のメンタルヘルス発達の理解の重要性について学術的貢献を促す。さらに，アジア圏の幼児に特化した子育て支援の方法の提唱に繋がり実践的貢献という波及効果も期待できる。

＜引用文献＞

Achenbach, T. M., & Rescorla, L. A. (2000). *Manual for the ASEBA preschool forms & profiles: An integrated system of multi-informant assessment.* University of Vermont, Research Center for Children, Youth, and Families.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation.* Erlbaum.

Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss: Vol.1. Attachment* (2nd ed.). Basic Books. (Original work published 1969)

Waters, E. (1995). Appendix A: The attachment Q-set (Version 3.0). *Monographs of the Society for Research in Child Development, 60*(2-3), 234-246. https://doi.org/10.1111/j.1540-5834.1995.tb00214.x

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Umemura, T. & Handa, K.
２．発表標題 Japanese infants’ cortisol levels and cries during the Strange Situation: Links to attachment classifications, non-maternal care, and adjustment.
３．学会等名 Mini Conference on Attachment from a Social Neuroscience Perspective（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Umemura, T., Kitagawa, M., Iwamoto, S., Chung, H., & Bureau, J.
２．発表標題 Japanese infants’ and preschoolers’ attachment behaviors during the Strange Situation: Let’s watch together.
３．学会等名 International Attachment Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 梅村比丘・大久保圭介・桂田恵美子・田附紘平
２．発表標題 日本の社会文化的環境における親子のアタッチメントの特徴
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

広島大学　発達心理学研究室 https://development.hiroshima-u.ac.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関